

SNW対話イン九州大学2018

平成30年12月27日
(世話役) 梶村順二



目 次

- I. SNW対話イン九州大学2018 実施概要
- II. SNW対話イン九州大学2018 詳細報告
 - 1. 基調講演概要
 - 2. 各グループ対話のテーマとシニア分け
 - 3. 各班の対話状況報告と講評
 - 4. 各参加シニアの感想
 - 5. まとめ



I SNW対話会イン九州大学2018 実施概要

平成 30 年 12 月 13 日

梶村順二

1. 日時

平成 30 年 12 月 10 日(月)14:30~18:40

2. 場所

九州大学(福岡市西区 九州大学伊都キャンパスウエスト 2 号館 931 号室)

3. 世話役

○大学 藤本望(教授)、松中一朗(学生)、○シニア 梶村 順二

4. 参加学生

地球環境工学科(2名)、エネルギー科学科(6名)、エネルギー量子工学専攻(11名)
の計 19 名(学部 3 年~D1)

5. 参加シニア: 9 名

(九州以外) 齋藤伸三(元日本原子力研究開発機構)

(九州) 泉館昭雄(元八幡製鐵)、大塚徳勝(元東海大学教授)、香川達雄(元東芝)、
金氏 顯(元三菱重工)、工藤和彦(九大名誉教授)、山田俊一(ニシム電子)、
山内真一(ニシム電子)、梶村順二(西日本技術開発)

6. 基調講演

講演者: 齋藤伸三 テーマ: 「わが国の原子力の現状と将来及び海外の原子力情勢」

7. グループ対話

4 班に分かれて以下のテーマについて対話を行った。

- ・ 1 班: 日本国内の原子力の安全性について(学生: 5 名、シニア 2 名: 山田、山内)
- ・ 2 班: 日本の今後における原子力利用(学生: 4 名、シニア 2 名: 金氏、泉館)
- ・ 3 班: 原子力業界での世界から見た現在の日本、今後の日本(学生: 5 名、
シニア 2 名: 工藤、香川)
- ・ 4 班: 世界的に見たこれからの原子力(学生: 4 名、シニア 3 名: 齋藤、大塚、梶村)
(講演会のみ出席: 1 名)

8. スケジュール(14:00 受付開始)

14:00~14:30 受付
14:30~14:40 開会挨拶(大学、シニア)
14:40~15:40 基調講演 齋藤伸三
15:40~15:50 集合写真撮影、部屋移動
15:50~17:50 各グループ対話、まとめ
17:50~18:30 グループ別発表・質問
(4 グループ)
18:30~18:40 シニアによる講評、閉会挨拶



9. 対話概要報告

これまでの対話会はエネルギー量子工学専攻（特定の研究室）の主催で実施していたが、毎年実施するにはリピーターが多くなり、対話会開催が危ぶまれていた。

そこで今回はエネルギー量子工学専攻（他研究室）の主催で公募方式を採用した結果、工学部地球環境工学科、エネルギー科学科の学生参加を得て、昨年より5名増の4班で実施することができた。

また、開催決定が遅くなり、かつ、公募方式を採用したため、参加学生名や事前質問の受付が開催2週間前と遅れたが、参加シニアの迅速な対応で回答等滞りなく準備ができた。

当日の対話会では、先ず齋藤シニアの基調講演「わが国の原子力の現状と将来及び海外の原子力情勢」において、学生側の聞きたい全容を丁寧に説明された後、各グループとも対話テーマに沿って、学生側司会進行により、真摯な対話討論が交わされた。

通常の対話会より90分短い対話会であったが、将来、原子力産業へ進むか否か進路選択に迷っている学生が多く、「原子力はこれからどうなるのか」、「原子力の信頼回復のために何をすればよいか」など切実なテーマで真剣に議論し、集約結果がグループ毎に発表された。

金氏シニアより、原子力の将来に不安を持つことだろうが、地球温暖化を踏まえた日本の国際約束、再生可能エネルギー変動調整問題や資源の枯渇等を踏まえれば、将来、原子力発電は絶対必要な電源であり大きな役割を持つことになる、学生へ激励の挨拶を述べ、講評とした。

以上

学生幹事と工藤シニアの開催挨拶に続き、参加シニアの自己紹介を行い、齋藤シニアの基調講演に移った。

1. 基調講演概要

○テーマ：「わが国の原子力の現状と将来及び海外の原子力情勢」

○内容

- 1) わが国における原子力開発の歴史
 - ・原子力時代の幕開け
 - ・JPDR が我が国初の原子力発電に成功
 - ・電力会社に原子力発電部門設置
 - ・原子力発電を支える産業群等
 - ・原子力発電所建設の足跡
- 2) わが国における原子力開発の現状
 - ・原子力発電所建設の足跡
 - ・エネルギー基本計画の具体的内容
 - ・原子力の位置付けと政策の方向性
 - ・福島事故後の原子力発電所の現状
 - ・原子力発電 20～22% (2030 年) は可能か (厳しい状況になっている。)
 - ・原子力発電はなぜ必要か。
 - ・原子力発電所の安全はどのように改善されたか。
- 3) わが国における原子力の将来
 - ・エネルギー選択を行うに当たっての 4 つの視点
エネルギー安定供給、地球環境の適合、経済性、原子力の安全確保と将来リスクの低減
 - ・国や電力会社の戦略としてのエネルギー選択
 - ・原子力問題に関する総括的解決策を要する項目
新增設、放射性廃棄物処分場の確保、核燃料サイクル堅持の再確認、原子力理解促進
 - ・原子力業界の将来像 (個人的な予測)
- 4) 海外の原子力情勢と次世代炉の開発
 - ・原子力発電利用の現状と将来
 - ・世界の原子力発電の見通し
 - ・次世代炉の開発 (GIF、SMR)
 - ・わが国の高速炉開発
- 5) まとめ
 - エネルギー自給率を上げるためには、再エネ、原子力の利用が欠かせなく、原子力については次の課題克服が必要。
 - ・安全確保第一として、社会がその必要性を理解することが前提。



- ・政府の明確な方針提示、指導力の発揮、民間の活力発揮
- ・技術力の維持・向上、人材の育成、確保

2. グループ対話のテーマとシニア分け

- 1 班：日本国内の原子力の安全性について 山田、山内
- 2 班：日本の今後における原子力利用 金氏、泉舘
- 3 班：原子力業界での世界から見た現在の日本、今後の日本 工藤、香川
- 4 班：世界的に見たこれからの原子力 齋藤、大塚、梶村

3. 各班の対話状況報告と講評

1) 1 班

- 対話テーマ：日本国内の原子力の安全性について
- 参加シニア：山田俊一、山内真一
- 参加学生：5 名（エネルギー科学科 3 年 2 名、
エネルギー量子工学 4 年、MC1, 2 年各 1 名）

○対話の概要

①対話の進め方

- ・自己紹介を兼ねて、ファシリテーション用紙をもとに、学生から、各自が今日の対話に期待すること、質問、疑問、要望を、紹介した。その後、学生の希望順に、学生の質問に答えて行く形で、対話を進めた。
- ・個々の学生とシニアが、質疑するだけでなく、他の学生にも、関連する質問を出してもらいながら、全員で議論する雰囲気づくりに努めた。

②対話の内容

- ・原子力専攻の学生だけあって、原子力の知識は十分有しているが、再処理工場の稼働状況など原子力産業界の実情や、地層処分地の選定が進まない理由など、原子力を取り巻く現状についての情報を求めている様子であった。
- ・学生からの質問には、できるだけ直接答えることはせず、他の学生の考えを聴くなど、学生同士の意見交換ができるよう努めた。学生たちは、率直に自分の考えを発言してくれて、シニアが一方的に話すことはなかったように思う。
- ・高レベル廃棄物処分について、放射性核種の長期の閉じ込めが可能かどうかの議論では、「放射性核種が崩壊によってかなり減衰することをもっと説明すべきである」とか「数万年後には、そもそも人類が存続しているかどうかも疑わしい」といった意見も出て、与えられた情報をもとに自分なりに考えていることがうかがえた。

③主要な質問と議論の内容

【地層処分】

- ・地層処分の技術的な信頼性について
- ・地層処分候補地の選定の状況
⇒北欧では、処分地は決定している。日本では NUMO が全国各地で説明会を実施している状況。
- ・北欧では処分地が決まるのに、日本では決まらないのはなぜ。
⇒日本でも正しい知識をもてば賛成してくれる。



処分地決定では、自治体が名乗りをあげても、知事が政治的理由で反対したり、全国から反対派が来たりする。原子力に批判的なマスコミの存在も影響している。

- ・処分地が不足することはないのか

⇒日本で原子力発電によって発生するガラス固化体は約4万本と想定されており、数キロ四方の処分場1か所で処分可能。処分する場所が不足することはない。

【テロ対策】

- ・戦争や紛争時に原子力発電所が攻撃対象になりうるか。

2) 2班

○対話テーマ；日本の今後における原子力利用

○参加シニア；金氏 顯、泉館昭雄

○参加学生；4名（エネルギー科学科3・4年各1名、
エネルギー量子工学4年、D1年各1名）

○対話の概要；

①対話の進め方

- ・学生リーダー道野君が、対話の進行を担当、自己紹介並びにファシリテーション用紙に記載した「今日の対話に期待すること」、「今日聞きたい質問、疑問、要望など」を各自説明した。

②取り上げたテーマと結果

- ・日本の原子力の現状と課題

事前質問&回答書をベースに議論し、第5次エネルギー基本計画の課題を確認した。

- ・高速増殖炉、小型炉等、今後の原子力の動向

事前質問&回答書をベースに議論し、原子燃料サイクルは、日本の原子力政策の基本であり、実用化は必須であろう事を議論した。

- ・原子力推進に向けて、国民の理解・信頼を得る戦略を主体に議論

現状の偏った、多くのマスコミ（NHK含む）報道の問題を踏まえ、草の根活動（国民が理解できる説明、膝をつき合わせた、事実の説明）を続ける必要があることを確認した。学生自身にも、身近な方々に説明する事を要望した。

- ・その他

大学で、勉強以外に学ぶべき事として、英語力、良き友人、卒業後も研究室と絆を持つことが必要。



3) 3班

○対話テーマ；原子力業界での世界から見た現在の日本、今後の日本

○参加シニア；工藤和彦、香川達雄

○参加学生；5名（エネルギー科学科3年2名、
地球環境工学科4年1名、
エネルギー量子工学MC1年2名）

○対話の概要；

- ・5人の学生さんの対話に期待することは、基本的に、原子力業界の経験のある人から信頼できる原子力についての話を聞いて、原子力に対する自分の知識や考えを確固たるものにして、原子力業界



やエネルギー問題についての正しい見識を持ちたい、ということであり、更には、かつて原子力産業で活躍してきた人たちが、現在の日本の原子力業界をどのように見ているのかも知りたいということであった。

- ・対話の内容を具体的に列挙して行くと、1. 濃縮や燃料サイクル、高レベル廃棄物処理などを考えると、原子力発電の経済性が成り立つのか？ 2. もんじゅが廃炉になった後、日本の高速炉増殖炉研究はどうなるのか？ 3. 日本が世界の原子力産業界に新規に参入する難易度は？ 4. 原子力業界での働き方について？ 5. 日本の原子力の現状は実際どうなっているのか？ 6. 廃炉の分野での競争力は？ 7. 福1事故後、原子炉の安全対策に於いて特に大きく変わった点は？ 8. 再生可能エネルギーの将来性、原子力に変わることは出来るのか？などであり、これらの内容については殆ど、対話会前の齋藤伸三氏の講演で述べられており、また、2, 3日前に、工藤さんと私から、第三班のテーマの解答書が送られていて、既にそうした文書を読んでいたということもあって、対話会の時にはもうかなりの知識を持っていた。質問の仕方、念を押すようなものもあった。
- ・しかし、彼らが一番不思議に思ったことは、将来的な世界のエネルギーの需要や温暖化防止の面からも、また全世界的な趨勢からしても原子力が最も有望であるにもかかわらず、日本国内での原子力に対する対応や動きが極めて消極的である点で、対話の内容からも恐らく彼らの最も不思議に思った、また不満に思った点ではないかと想像された。
- ・原子力に対してあまり関心もない一般の国民に対して、新聞やテレビなどのマスコミが日本のエネルギー問題や世界の温暖化など考慮することなく、単に、大衆に迎合して原子力は危険なものである、出来ることならば原子力を使わないエネルギー政策こそが正しいと無責任に宣伝広報してきたためではないか、また政治家も票がほしいために、これまた大衆迎合し、出来るだけ原子力のことには避けている。ということに気が付いたようだ。これは素晴らしい対話会の成果だと思った。彼らのような将来日本の技術を背負って立つような若者には堂々と原子力の必要性を主張してもらいたい。その恩恵を受けるものは彼ら自身であることを十分認識しているからである。

4) 4班

○対話テーマ：世界的に見たこれからの原子力

○参加シニア：齋藤伸三、大塚徳勝、梶村順二

○参加学生：4名（地球環境工学科4年1名、
エネルギー量子工学4年、MC1, 2年各1名）

○対話の概要

学生司会のもと、自己紹介と今回の対話会で聞きたいこと、期待することを述べてもらった。その後、事前質問事項（5項目）の回答や今回の基調講演を踏まえての追加質問に対して逐次シニアが回答し、議論を深めていく形をとった。議論の結果、学生がまとめ発表した概要は以下のとおり。



① 今後の原子力戦略（今後どのように原子力の重要性、必要性を国民に理解させる）

- ・地道に原子力・放射線の教育を進めていく

定量的な説明でどの程度の放射線が危険であるのか、積極的に情報発信していく（SNSなど）、公的な議論を何度も行う。

② 人材育成・高温ガス炉の将来

- ・原子力業界の若手に要求されるものは、基本的な知識、能力がまず必要。加えて、炉物理や原子力システム全体を俯瞰することが必要。
 - ・高温ガス炉」の実用化が進まない理由
電力供給方法におけるニーズの問題、水素製造など発電以外での利用を売り込むことが必要。
- ③ 日本の原子力の将来（日本が原子力に力を入れるのか）
当然原子力を推進するはず。新型原子炉の建設は民間のみでは行えないので国が投資しなければならない。
- ④ 再処理研究の進展（六ヶ所再処理工場で問題が多発しているが、再処理が可能なのか）
軽水炉と違い再処理は実施国が少なく、機密が多いので国産技術で進めると当然問題が発生する、一つ一つ問題を解決しなければならない。

5) 講評 金氏 顯

九州大学は九州で唯一原子力専攻のある大学であり、昨年に続き今年も対話会を開催でき、2世代近くも年齢が異なる皆様と日本のエネルギー、原子力について語り合うことが出来て大変嬉しく思います。まず、藤本先生と学生幹事に感謝します。

齋藤伸三氏から日本と世界の原子力の事情、将来について、学生からの沢山の要望に応じて具体的で詳しい講演がありました。大変に貴重な内容なので、ぜひ今後も読み返してください。



4班に分かれての対話では複数の班に共通の話題がありました。まず第一に我が国で今後原子力の新增設はあるのか？、高速炉の実用化（商業炉の建設）はあるのか？、これから原子力業界に就職しようと考えている皆さんの切実な質問でした。残念ながら今年7月に閣議決定した第5次エネルギー基本計画では多くの委員から指摘したにも関わらず「新增設」の言葉は織り込まれませんでした。これは政治的な背景があり、来年夏の参議院選挙後に憲法改正を発議できれば原子力についても政府が前向きな発言をするでしょう。つい最近エネ庁は小型炉（SMR）など新型炉の開発ベンチャーへの資金援助、また高速炉の開発工程表骨子で今世紀中ごろには実用化するとしました。すでに予兆が出ています。皆さん方が50歳代、企業でもトップクラスになる時期です。大いに期待して良いと思います。

次に原子力の信頼回復についての意見交換も複数の班でありました。福島事故から7年以上経ちましたが、世論調査では国民の過半数が再稼動に反対の意見です。しかし年齢別にみると20、30歳代の若者は70%以上、理工系だと80%以上が賛成です。信頼回復には皆さんたち若者の原子力、放射線の理解が鍵になります。友人や家族とエネルギー、原子力、放射線について語り合ってください。また、選挙に投票して皆さんの意思を示してください。

皆さんは数年のうちに社会に出ます。資源小国の日本にあっては原子力は必要不可欠のエネルギーであり、エネルギー、原子力を専攻する諸君たちはぶれることなく、関連する業界に進んでいただきたいと願っています。

4. 各参加シニアの感想

○山田俊一

原子力工学科の学生に対して、限られた時間の中で、きちんとした説明を行う難しさを感じた。同時に基本的な知識は知っていても、実務に即した知識がなければ、原子力専攻の学生を納得させるのは難しいと思う。20名程度の学生数であれば、グループ対話するよりも、各分野の専門家を招いて、全員で議論する方式がいいのかとも思う。その場合、対話の時間は、もっと必要であるが。

対話の間に、学生生活の状況などを聴き、単位取得に苦労しているようすもうかがえて、個人的には、自分の学生時代を思い出して楽しい時間であった。

○山内真一

一般の方々と違い、原子力専攻の学生だと思いき知らされる場面が多々あり、それぞれの専攻に対する質問となると、答えを持ち合わせていないこともあった。(特に、高温ガス炉の話題など)

学生生活の輝きを持っている人、学業に専念している人、企業名を挙げて、就職の話をするなど、それぞれの話を聞く事ができ、40年前にタイムスリップしたような感覚になり、限られた時間ではあったが、楽しく会話できたと感じる。

○金氏 顯

九大での対話会は今年は開催しないと聞き、残念に思ったが、これまでの出光研とは別の藤本研究室や他学科にも声をかけて20名弱の学生が参加し開催できた。藤本望先生に感謝。来年以降、研究室を交互にして毎年開催できるようになれば良いと思う。

齋藤伸三氏の基調講演が総括的かつ高い視点から世界と日本のエネルギー事情、原子力事情を詳細に論じた。大変貴重な内容だったので、学生達も大いに参考になったことと思う。

グループ対話では他大学と違ってとことん原子力の将来について前向きに語り合う事ができて非常に満足した。そして日本の将来の原子力に悲観的になりそうになっている学生たちに、高い視座から長い目で考えることの重要さを話しして勇気を与え、また学生から企業技術者としての心構えや、学生時代にやっておくべきことなどを聞かれ、体験談を語ることが出来たのも嬉しい。

残念だったのはグループ対話時間が通常より1時間以上短かったこと、また懇親会が無かったこと。来年度はぜひ時間を延長して欲しい。

○泉館昭雄

議論時間、まとめる時間が不足した。後日今回の学生メンバーでの議論を願う。

日本の今後における原子力利用の最終ゴールは、「化石資源の代替エネルギーの確保」(ATOMO Σ11月)という視点であり、この観点で原子力利用に直面してほしい。

学生諸君には、良い刺激となったと確信する。

○工藤和彦

平成30年12月10日の対話イン九大に参加した。齋藤伸三氏の基調講演にはよく整理された資料が使われ、現在の原子力界の政策、産業、研究の状況が詳細に紹介された。この内容は対話会での話題とも密接に関係しており、学生たちからのいくつかの事前質問にも答えているものであった。

対話会では、工藤は香川氏とともに第3班で「原子力業界での世界から見た現在の日本、今後の日本」を、エネルギー量子工学専攻の学生2名、エネルギー科学科が計2名および地球環境科学科の学生1名の計5名と話をした。

原子力発電所の新規建設、リプレース、廃炉、処分場、安全対策、原子力産業の海外進出、技術継承などが取り上げられた。今回の特色として原子力が国民に理解、信頼されていない背景について、いろいろな意見が出され、福島復興の必要性、マスメディア（SNSを含む）の問題、教育の重要性などについての認識が深まったことは大きい成果だと思う。自分たちの将来の進路選択の参考にしたいとのことであって、皆非常に熱心に参加したと感じる。

地球環境科学科の学生は放射線の話はやや難しかったようであったが、できるだけやさしく解説して、疎外感を持たれないように努力した。アンケートでどのような感想であるか、楽しみである。

対話の内容は、原子力を専攻する学生たちだけあって、基礎的な技術的質問ではなく、原子力の社会的な問題についての突っ込んだ意見交換が多く、シニアにとっても大いに参考になるものであった。

○香川達雄

学生は5人で何れも工学系のエンジニアや研究者を志望しており、元々原子力発電に反対もしくは懐疑的な考えは持っていない人々で、対話の内容は極めて前向きなものであった。

現在の日本の原子力業界の現状を知っており、如何にしてこの現状を打破して、国際的に日本が発展していけるのかという事に非常に関心があった。具体的に原子力のどのような部門でなら日本は世界に認められるようになるのか。事故を起こしたのであれば、安全な原子炉を、廃炉の技術に力を入れているのであれば、廃炉の技術を売り物にできないのか、高速炉もんじゅを辞めたなら高速炉の研究はどうするのか等、兎に角自分たち若い世代が何とか日本の原子力を再興しなくてはならないという意気込みが感じられた。

そして、結局は日本の原子力がなぜこんなに消極局的なのかの原因が対話中で解り、それが主にマスコミや、政治家の国の将来を考えない、目先の自分の利益のみを考える行動によるものであることが、我々シニアから示されたことで「やはりそうか」と言った感じが受け取れた。うすうす知っていたにせよ、若い人から見れば極めて残念なことであったと思う。

この辺のことをもう少し話し合う時間があればよかったと思う。何れ数年のうちに日本も原子力発電を重要と考えるようになるだろうという希望的な観測は甘いと思うし、それまでに世界とは大きく差をあげられていることは明らかなように思う。

今後は、我々SNWはこうした日本の将来を考える真面目な若者たちのために、もっとマスコミや政治家の考え方を根本から改革して行くことが必要であるとしみじみ思った。

○齋藤伸三

第4班の対話テーマは、「世界的に見たこれからの原子力」であったが、学生が用意していた質問は、テーマに拘ったものではなく、個々に答える形式で進んだ。日本の原子力政策をどのように有効かつ確実に進めていくのかと言う大上段からのもの、原子力発電等の技術は将来的にも需要があるか、さらに、原子力を専攻した者は他学科の卒業生と差別化してどのような分野で力量を発揮できるか等々が話題となった。原子力を着実に進めることについては、最後は一般国民の理解を如何に得るかの議論となり、副読本を利用した小、中、高校生およびその父兄等へのアプローチも一つ方法であると述べたところ、共感を覚え、自分もそのような活動をやりたいと意欲的な学生があったことは頼もしく感じた。また、他の二例は、自らの将来を心配したもので、現在の日本の原子力を取り巻く状況に不安を感じている

ことに因るものであるが、自らの信じる道を自信を持って進んで欲しいし、万一、本当に原子力の先が見えなくなっても逞しく自らの道を探して欲しい。九大生は、その逞しさを持っている筈だから。

○大塚徳勝

齊藤シニアの基調講演『原子力業界の過去を踏まえた上で考える、日本と海外原子力業界の現状、未来』は、原子力開発の動向を縦断的・横断的にとらえた、九大の学生に合った格調の高い、素晴らしい内容であった。

基調講演の後、第4班は齊藤氏と梶村氏と小生の3人のシニアで、4人の学生と「世界的に見た、これからの原子力」について対話を行なった。

主な項目は、①原子力の必要性を国民に理解してもらうための、今後の原子力戦略、②高温ガス炉の将来性、③再処理工場の現状と課題、④原発と再生可能エネルギーの競合問題など、いずれも我が国が抱えている難題について、技術的な視点と社会的な視点から対話を行なった。「事前の質問と回答」方式により、かなり対話効果はあったと思う。

学生の専門性もさることながら、学生諸君は総じて、他の大学では見られないほど、関心も問題意識も高く、さすがに九州の雄に相応しい学生と感じた。

大きくつまづいた日本の原子力を、きっと立ち直らせてくれるものと信じて止まない。彼らには、「レベル9」の評価を与えたい。

○梶村順二

今回の九大対話会は私が世話役として2回目となる。これまでの開催はエネルギー量子工学専攻（特定の研究室）に毎年お願いのうえ、学生幹事と調整しながら進めていたが、ほとんどの学生がリピーターとなるため、学生側のニーズがなく開催が危ぶまれた。そこで今回は藤本先生にお願いし、学生幹事の紹介とともに公募方式で参加者を募集して頂き、他学科の学生参加を得ることができた。藤本先生及び学生幹事には感謝を申します。急遽の開催で、且つ公募方式のため、参加者の確定まで時間を要したことから準備時間がほとんどなかったが、学生幹事やシニアが素早く対応していただき開催することができた。

今回の対話会は、原子力関係に就職したい学生やこれから原子力に進むべきか悩む学生にとって、原子力を経験したシニアとの対話は自分達の方向性を確認するうえで、非常に有益であったと思う。

今回は参加人数を原子力専攻以外にも広げることができたので、今後はエネルギー量子工学専攻の2つの研究室に、交互に主催して頂くようお願いしていきたい。また、カリキュラムの関係で難しいと思われるが、対話時間を十分確保できるよう13時開催を働きかけていく。

5.まとめ

これまでの対話会はエネルギー量子工学専攻（特定の研究室）の主催で実施していたが、毎年実施するにはリピーターが多くなり、対話会開催が危ぶまれていた。

そこで今回はエネルギー量子工学専攻（他研究室）の主催で公募方式を採用した結果、工学部地球環境工学科、エネルギー科学科の学生参加を得て、昨年より5名増の4班で実施することができた。

また、開催決定が遅くなり、かつ、公募方式を採用したため、参加学生名や事前質問の受付が開催2週間前と遅れたが、参加シニアの迅速な対応で回答等滞りなく準備ができた。

当日の対話会では、先ず齋藤シニアの基調講演「わが国の原子力の現状と将来及び海外の原子力情勢」において、学生側の聞きたい全容を丁寧に説明された後、各グループとも対話テーマに沿って、学生側司会進行により、真摯な対話討論が交わされた。

通常の対話会より90分短い対話会であったが、将来、原子力産業へ進むか否か進路選択に迷っている学生が多く、「原子力はこれからどうなるのか」、「原子力の信頼回復のために何をすればよいか」など切実なテーマで真剣に議論し、集約結果がグループ毎に発表された。

金氏シニアより、原子力の将来に不安を持つことだろうが、地球温暖化を踏まえた日本の国際約束、再生可能エネルギー変動調整問題や資源の枯渇等を踏まえれば、将来、原子力発電は絶対必要な電源であり大きな役割を持つことになる、学生へ激励の挨拶を述べ、講評とした。

以上

（回収数：19名）

